

中学校柔道の実施と指導者の問題意識

—中学校保健体育教諭のアンケート調査から—

野村 武弘¹⁾・三戸 範之²⁾・松本 奈緒³⁾

Awareness of problem and consciousness of Judo teaching as secondary physical education: Questionnaire survey for junior high school physical education teachers

NOMURA, Takehiro ; SANNOHE, Noriyuki ; MATSUMOTO, Naho

Abstract

This study clarified the awareness of the problem and con teaching Judo in junior high school physical education. A questionnaire survey was conducted with ten junior high school physical education teacher (seven men and three women), among which two people had Judo experience as athletes and eight had no experience. The following aspects were the number average of Judo lesson in one unit was nine or ten and there was no relationship with teachers' Judo experience. The teacher deemed that the students should learn the following content in Judo classes : high score group included safety and judo falling techniques, martial arts manners and respect attitude toward the partner, and rule compliance. The upper middle score group include Judo history and tradition, responsibilities for judo falling techniques, basic motion, ability to think, ability for problem solving. The lower middle score group included knowledge and contrivance, throw techniques, ground fighting techniques. The low score group included applied skills and referee regulations. The notable aspects of Judo teaching in physical education (PE) first included safety issues such as safety consciousness, teaching break falls, safety checks of facilities and the practical use of teaching tools for safety. Second they comprised teaching ingenuity including the technical dimation of organizing step-by-step learning or the use of information and communication technology (ICT), the mentall dimation of martial arts manners, consideration for partners, enjoyableness of Judo, cleanliness and plastic surgery as grooming. The problems and consciousness for Judo teaching in PE included the following four categories : facility problems, teaching problems, accountability toward students' parents and others. Facility consciousness concerned whether there is sufficient space for the Judo gym (*Jyu-dojyo*), and coordinating off time for replace traditional mats (*tatami*). The teaching prodloms and consciousness included step-by-step learning, teaching material ingenuity, good demonstration of experienced Judo student support for low skill students, and support for low skilled and lack of fitness level students. Regarding explanations to parents, accountability included explanations on Judo wear shopping and on students' injury. "The category at others" included hygiene measures related to COVID-19.

Key Words: Judo, junior high school physical education, awareness of problem and consciousness of Judo teaching

1. 緒言

平成 18 年 12 月、近年の子供たちの体力低下、若年層におけるモラルの低下や少年犯罪の増加等の、社会情勢の変化を受け、教育基本法が改正され、その第二条（教育の目的）に「健やかな身体を養うこと」と「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛

するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が定められた。この改正教育基本法を踏まえて、平成 20 年 3 月に改訂された中学校学習指導要領で第 1 学年、第 2 学年は武道を含めたすべての領域が必修となった。武道各種の中では、柔道を行う中学校が多い。「令和元年度 武道指導に関する状況調査」の結果によると、柔道は全体の 63.12% を占めていた。（スポーツ庁、2019）

中学校体育分野において柔道は、指導が難しいと感じ

1) 秋田大学教育文化学部 学生

2) 秋田大学教育文化学部 教授（教育実践講座）

3) 秋田大学教育文化学部 准教授（教育実践講座）

ている教員が多いといわれている。箱島・齋藤ら（2014）は授業において柔道を実施する際についての問題があるとしている。ひとつは施設・用具の不備である。武道上の有無は授業内容や安全面にも影響し、柔道衣の準備に関しての負担や衛生上の問題があり学校間で格差がみられた。次に指導上の問題であり、具体的には安全優先のため内容制限や男女共習上の問題、女子の体力不足と柔道への抵抗感、指導教員の知識不足からくる指導上の不安などがあげられている。また、段位保有者が指導者全体の38.3%であり、半数に満たず、専門的な指導がしにくい問題もある。また、施設用具の不備については北村ら（2017）も課題が多くあげられるとしている。

スポーツ庁委託事業で流通経済大学が実施した全国調査（2020）による、教師を対象にした思考・判断に関する項目では「課題を解決するための練習方法を生徒が選ぶことができるように、課題に応じた練習方法を提示するなどの指導の工夫をしていますか」の質問において肯定的な回答が74.1%であり、多様な武道の授業の工夫の現状が報告されている。また、北村ら（2017）は必修化によって期待される教育効果を達成するためには、選択から必修へと扱いが変わる中、現場で授業を担当する教員がどのような課題に直面しているのかを明らかにし、それらを克服していくことが不可欠である、と述べている。

しかし、実際に柔道の授業を行う上で、以上の問題点や、課題を補う、授業計画はみられず、どのように改善していくのかは明確ではなかった。そこで本研究では、秋田県内の中学校保健体育教師に、柔道の授業に対する意識調査を行い、柔道の授業における問題を更に明確にし、より効果的な授業計画を提案することを目的とする。

2. 研究の方法

A県の中学校保健体育教師10名を対象に、中学校の体育授業の柔道の指導についての質問調査紙法で調査を行った。調査実施はA県総合教育センターの協力を得て、センター主催の現職教員研修休憩時に実施した。調査の際には、何のために研究を実施するのか口頭で伝え、研究協力を求めた。また調査紙には研究結果は個人情報にならないように集計すること、所属する学校の校長等管理者には回答の内容を伝えないことを明記した。

調査紙は、穴井（2015）の先行研究で用いられた調査紙を踏襲し、性別や教員歴等の属性、対象者の柔道の経験の有無、どんな授業計画で柔道を実施する予定なのか、柔道を通して生徒に身に付けてほしいと思うこと、柔道の授業で特に注意していること、柔道の指導で心配だと思うこと等の質問項目を設定した（資料1参照）。

回答形式は選択肢から選択して回答する項目と自由回

資料1 質問調査紙

体育授業（柔道）に関するアンケート

本研究は中学校での柔道の実施状況や現状を捉える研究目的（卒業論文）で実施されます。集計した結果は所属や個人情報が分からないように集計・分析され公表されます。また、回答した内容が所属先に伝わることもありませんので、自由にご回答下さい。

1 学校名、性別、教員歴を教えてください。

学校名： _____ 性別： 男 ・ 女 教員歴： _____ 年

2 柔道経験（競技者歴）はありますか。「ある」と答えられた方は具体的に教えてください。

ある _____ ない _____

「ある」と答えたら→ _____

(例) 中学校と高校でも年間数回参加していた 現職経験のみです。

3 柔道の授業は年間を通して各クラス何回行う計画ですか。

() 回柔道の授業を行う予定(行った)。

4 柔道の授業を通して下記に示す事柄を生徒に身に付けてほしいと思いますか。該当するところに○をつけてください。

		さう思う	どちらともいえない	さう思わない
1) 柔道の審判規定(ルール)を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
2) 柔道の歴史や伝統的な考え方を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
3) 技を受けてあげるなど責任を果たす心を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
4) どのようにしたら技がかかるか考える力を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
5) 体捌きや足捌きなど基本動作を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
6) 連絡技、返し技など応用した技を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
7) 自分や仲間に関する課題を克服する力を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
8) 周囲を確認し安全に授業を行う態度を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
9) 相手や仲間を尊敬する心を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
10) 技の名称や技の動きの仕組みを身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
11) 身体を守るための受け身の技術を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1
12) 礼法や正座の仕方等を身に付けてほしい。	5	4	3	2 1

13) ルールにのっとり規則を守る心を身に付けてほしい。

14) 相手を抑え込むなどの寝技の技術を身に付けてほしい。

15) 基本となる技(立ち技)を身に付けてほしい。

5 柔道の授業を行う際、特に注意していることを自由にお書きください。

6 柔道の授業の中で、指導上の悩み等があれば、ご自由にお書きください

7 柔道以外も含めて「体育授業とは何か(どうあるべきか)」自身の考えをご自由にお書きください。

答の項目の2種を設けた。具体的には、柔道を通して生徒に身に付けてほしいと思うことについては、調査紙は、穴井（2015）の先行研究で用いられた15項目を踏襲し、「さう思う」の5から「さう思わない」の1まで5段階で選択回答する欄を設けた。また、柔道の授業で重要だと思うこと、柔道の指導で心配だと思うこと等は自由記述で回答欄を設けた。

研究の分析方法は、主に選択肢から選んだ回答を単純集計で集計し、特徴のあるものについては教員歴や柔道経験とクロスして考察した。自由記述については、KJ法で分析し、教員養成系学部4年生1名と大学で体育科教育を専門とし大学での教職経験が19年（国立教員養成大学勤務15年）である研究者1名が共同で分析し、その後大学で柔道を専門とし、柔道の経験が46年（講道館八段保持者）、大学での教員経験が32年の研究者1名が分類を確認した（研究者のトライアングレーション）（メリアム、2010）。

3. 結果と考察

3-1. 対象者の属性

全10人中、男性7名、女性3名であった（図1参照）。教員歴は1～3年1名、4～9年4名、10～19年1名、20～29年2名、30年以上2名であった（図2参照）。つまり、初任期1名、中堅期5名、熟練期4名であった。

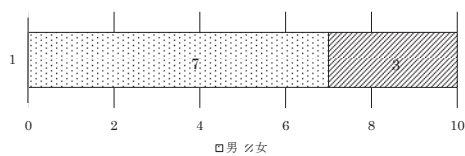


図1 性別

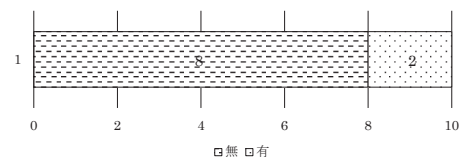


図3 競技歴

柔道の競技歴については、無しが8名、有りが2名であった（図3参照）。

3-2. 柔道の授業の実施と単元の回数

柔道の授業については、実施なしが1名であり（剣道実施）、単元を構成する回数は、6～8回が1名、8回が1名、9回が1名、10回が4名、12回が1名、15回が1名であった（図4参照）。総括すると、8回以内の比較的短い単元を実施するものが2名、9～10回の中間の長さの単元を実施するものが5名、12～15回の比較的長い単元を実施するものが2名であった。このことから、9～10回の回数で柔道の単元を実施する教師が最も多く、12～15回の比較的充実した単元で実施するものも2名いたことが明らかになった。なお、単元の回数と柔道の経験との関連をみた所、柔道の経験のある教師は6～8回、10回と回答しており、12～15回の比較的充実した単元で実施しているのは柔道経験のない教

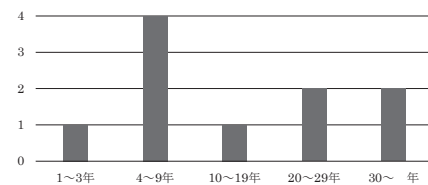


図2 教員歴

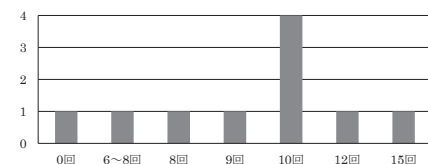


図4 1単元の授業回数

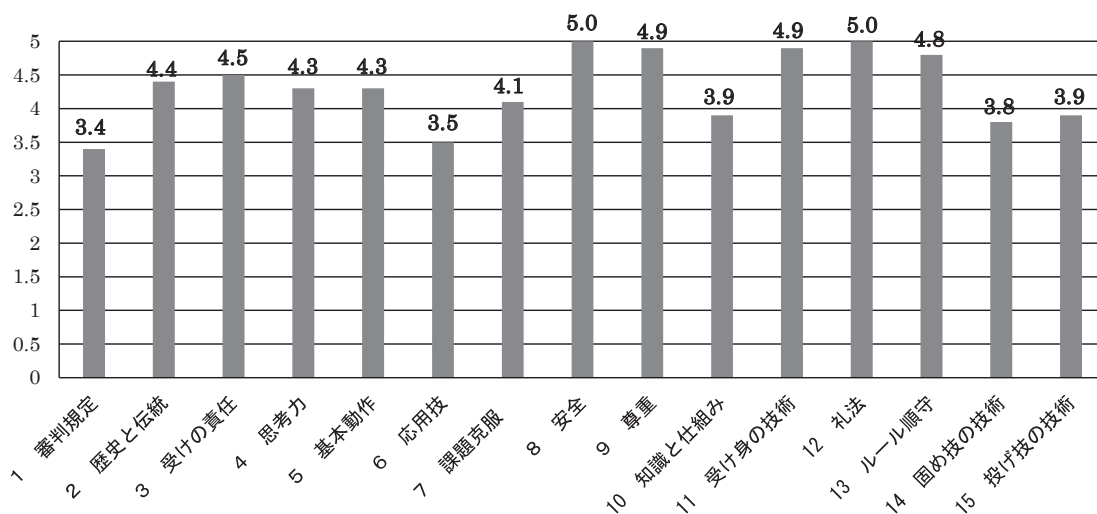


図5 この授業を通して身に付けてほしいこと

師であり、柔道の経験のある教師が比較的長い単元での授業実施を行っていた訳ではなかった。

3-3. 柔道の授業を通して身に付けてほしいこと

本項目は各質問項目に対し、「そう思わない」の1から「そう思う」の5まで5段階で対象者に回答してもらった。全員の回答の平均値を求め、比較した。また、各質問項目に対して、ラベルをつけ内容を整理した。研究の結果以下が明らかになった(図5参照)。

柔道の授業を通して身に付けてほしいことで、最もスコアが高かったのは「安全」と「礼法」でありスコアは5であった。次に高かったのは、「尊重」と「受け身の技術」であり、4.9であった。次に高かったのは「ルールの順守」であり4.8であった。

次に高かったのは、「受けの責任」であり、4.5であった。また「歴史と伝統」は4.4であった。

次に高かったのは、「思考力」と「基本動作」であり、4.3であった。また、「課題克服」は4.1であった。

次に高かったのは、「知識と仕組み」、「投げ技の技術」であり、3.9であった。また、「固めの技術」は3.8であった。

次に高かったのは「応用技」であり、3.5であった。

最も低いスコアであったのは、「審判規定」であり、3.4であった。

まず、高いスコアを得た項目から考察すると、まず、「安全(5.0)」に関しては柔道に関する事故防止の観点から、生徒自身が安全を確認した上で柔道を行ってほしいという意見に全員が「そう思う」と回答した。また、「受け身の技術(4.9)」についても身体を守るための受け身の技術を身に付けてほしいという意見にほぼ全員が「そう思う」と回答した。柔道の授業時や部活動中の学校での事故が起こっていることから、安全に常に気を配る態度や自分の身を守るための技術を特に気をつけさせたいという教師の意見が全員にみられたと考えられる。

次に「礼法(5.0)」、「尊重(4.9)」に関しては、平成29年度告示の中学校学習指導要領体育編、「武道」には学びに向かう力、人間性の観点において、「相手を尊重し、伝統的な行動を守ろうとすること」、の中に『「礼に始まり礼に終わる』といわれるように、相手を尊重し合うための独自の所作、所作を守ることに取り組もうとすること』(文部科学省, p.152)と礼法に関することが記されている。この礼法や相手を尊重する態度は武道領域特有の学習内容であり、それが教える立場である教師に浸透していることから、「そう思う」と回答した全員にみられたと考えられる。

また、「ルール順守(4.8)」に関しても高得点を得ているが、これは前出の観点とは異なり、他の領域にもみ

られる共通の学習内容である。スポーツ教育論としての体育の考え方が浸透し、スポーツ種目のひとつとして柔道を捉え、他のスポーツと同様、ルール順守の態度を身に付けてほしいと回答する意見が多かったと推察できる。

次に、回答のスコアが中位であった群について考察する。「歴史と伝統(4.4)」であった。これは、日本独自文化であり、伝統のある武道領域の特性であり、特有の学習内容である。他領域にはない独自の学習内容であり、これに対する尊重の気持ちから、中位の中でも比較的スコアが高かったことが考察できる。

次に「受けの責任(4.5)」は「技を受けてあげるなど責任を果たす心」に関する項目であり、活動や練習での態度の側面を示している項目である。この項目では練習に対する積極的な姿勢だけでなく、先ほど述べた「相手を尊重する伝統的な行動」を含んでおり、これに対する教師の認識が比較的高かったので中位の中でも比較的スコアが高かったことが推察できる。

「知識と仕組み(3.9)」、「基本動作(4.3)」、「投げ技の技術(3.9)」、「固めの技術(3.8)」については、技に関する知識や技の習得に関する項目であるが、これに関して、特に「基本動作」以外の3つの項目について「そう思う」、「まあそう思う」と回答した教師が多く、中程度の中でも比較的低いスコアになった。これは、柔道の技に関する知識や技の習得について、また、技の習得を通して動きの仕組みを身に付けることに関し、まだまだ認識不足の教師がいることを示している。むしろ、現在の体育の考え方においては技術習得至上主義ではないが、こういった技術的な習得の上で柔道の特性を味わうことが出来ると考えるが、教師にとってこれらの経験や、技の重要性に対する認識が低いことから中程度のスコアになったことが考察できる。より言及すると、これが教師にとって教えることが一般的である球技や陸上運動といった領域であれば、技術的な観点は身に付けるべきこととして認識されていると予測できる。柔道の経験者が10人中2人であり、また、他の領域に比べ教材研究が十分でないことからこれらの結果が導きだされたと推察できる。さらに、回答の詳細を見てみると、教員歴3年目の初任期の教師が「知識と仕組み」、「投げ技の技術」、「固めの技術」について、「どちらともいえない」と回答していた。従って、体育授業の指導経験の浅い初任期の教師にとって柔道の技の知識や技術が重要であるという認識が低いことが明らかになった。初任期の教師にとって不得手とする領域の教材研究まで手がまわっていないことが予測できるので、初任期の教師対象の柔道の授業指導の講習会等の重要性が指摘できるであろう。

また、同様にスコアが中位であった「思考力(4.3)」

「課題克服 (4.1)」は生徒の思考・判断に関する項目である。特に「どのようにしたら技がかかるか考える力」である「思考力」に関しては、柔道における技を表面的な型の習得でなく、試合等で使うことができる段階へと発展させる為に不可欠であろうし、また技を深く理解するために重要な事項であると考えられる。また、「技に関する課題を克服する力」である「課題克服」に関しては、柔道の学習だけでなく他の領域の学習に通ずる、課題学習型の学習についての項目である。これらが中位群の中でも比較的高いスコアを獲得できていたということから、技を教え込むだけでなく学習者の思考・判断を促す柔道の学習づくりが目指されていることが確認できた。

最後に、回答のスコアが下位であった群について考察する。「応用技 (3.5)」は、柔道の技や技術に関することであるが、他の項目に比べてスコアが低かった。それは、「応用技」が連絡技等の技術的に上級であるものを扱っているために、そこまで単元の中で扱えない、または中学校の段階では指導は難しいと判断されたと推察できる。また、これに関して教員の職歴による回答の差はみられなかった。

「審判規定 (3.4)」に関しては審判規定やルールに関する項目であるが、学校での柔道の学習においてはおおまかなルールの把握が一般的であり、詳細な審判規定は

学ぶ必要がないと教師に捉えられたため、最もスコアが低かったことが推察できる。

3-4. 柔道の授業を行う際特に注意していること

柔道の授業を行う際、特に注意していることの分析結果は表1の通りになった。回答のほとんどが安全面についての意見であった。その安全面についての中でも大きく二つに分けた。抽象的な意見と具体的な意見である。抽象的な意見は指導についての意識や、配慮についてであった。特に事故や怪我の防止への配慮の意識を注意している、という回答を得ることができた。

それに対して具体的な意見はさらに二つに分類できた。一つ目は授業内での指導についてである。また、この指導についての中でも3種類に分けることができた。その1つが受け身の指導と授業のルールである。授業内での受け身を使ったウォーミングアップを行うなど、授業内での受け身の取り入れ方について注意している意見を得ることができた。また、受け身について他に分類できた回答がある。それが受け身の十分な理解についてである。受け身を重点的に指導し、受け身についての理解を深めたいという回答も得られた。三つめは技術的な指導による安全の確保についてである。思いやりの引き手、や無理な技をかけないといった柔道の中での技術について注意しているという回答を得られた。

表1 KJ法により分類した柔道の授業を行う際特に注意していること

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	極小カテゴリー	記述内容
安全面	抽象的	意識・配慮		<ul style="list-style-type: none"> 安全面への配慮を常に意識して取り組んでいる 安全面への配慮。 事故が起こらないよう最大限の注意をすること。 怪我の防止
			具体的	指導面
	受け身の十分な理解	<ul style="list-style-type: none"> 怪我をしないさせないこと…特に、受け身は重点的に指導し、「受」「取」それぞれの安全な行い方をデモンストレーションを行いながら、理解できるようにしている。 		
	技術的な指導による安全の確保	<ul style="list-style-type: none"> 思いやりの引き手。 無理な技をかけない。 		
	施設・用具	施設整備と確認		<ul style="list-style-type: none"> 畳のチェック。 道場がないので、体育館に畳をしきませます。ずれたり畳が悪かったりして怪我の無いようにしている。
		教具の工夫による安全の確保	<ul style="list-style-type: none"> マット等、痛みを感じさせない工夫。 	
指導の工夫	技術面	段階的な練習	<ul style="list-style-type: none"> 段階的な練習。 	
		ICTの活用	<ul style="list-style-type: none"> ICTの活用（視覚的に動きを捉えられるようにする） 	
		組み方統一	<ul style="list-style-type: none"> 立ち技では全員右組みに統一。 	
	精神的な面	礼法	<ul style="list-style-type: none"> 礼法をしっかり指導すること。 	
		思いやり	<ul style="list-style-type: none"> 相手のことを考えて技をかける。・対人競技の特徴（相手があつてこそ、思いやり）。 	
		楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> 柔道にあまりなじみのない生徒が多い中で「楽しい!」と思えるように工夫すること。 	
	清潔・整容面	見だしなみ	<ul style="list-style-type: none"> 対戦する楽しさを味わせる。 整容面（爪を切る、髪を結う、正しい着装など）も併せて指導している。・生徒の頭髪、手足の爪の長さ。 	

具体的な意見の二つ目の分類は、施設や用具についてである。施設については畳や道場がないといった、学校の施設について注意していた。畳のずれは怪我につながるため、畳についての回答があった。用具は、教具としてマット使用して安全面を確保する、といった工夫が見られた。

次に多かったのは指導の工夫である。指導の工夫は技術面、精神的な面、身だしなみの3つに分類できた。まず、技術面は段階的な練習、ICTの活用、組み方の統一があった。この3種類の工夫についての回答が得られた。授業の中で、柔道をする上での技術的な面に注意している回答であった。

次に、精神的な面は礼法、思いやり、楽しさがあった。武道を指導するうえで重要な礼法について指導することに注意している回答が得られた。思いやりは、柔道は対人競技ということで自分一人ではできないため相手への思いやりについて注意しているという回答も得られた。思いやりに類似しているが生徒に柔道を通して柔道の楽しさを感じてもらいたいという回答もあった。

最後に清潔・整容面であった。爪を切る、髪を結う、正しい着装などの生徒の身だしなみについて注意して指導しているという回答が得られた。

3-5. 柔道の授業の指導上の悩み

柔道の授業の中で指導上の悩み等の分析結果は表2の通りになった。この回答はKJ法により大きく4種類に分類できた。まず一つ目は施設についてである。「道場の広さ」では、道場の広さが生徒数に対して狭く、上手く運動するスペースを取ることが難しいという回答が多く道場の広さについて悩みを抱えていた。また、「畳の設置時間」では、道場がなく畳を設置する必要があり、その設置のための時間がかかってしまうという回答も

あった。

二つ目は指導するうえでの悩みである。指導するうえでの悩みの回答は二つに分類することができた。まず、柔道を指導するうえで、生徒への支援の方法についてである。これについて4種類の回答があった。それは、「段階的な指導」「場の工夫と経験者の見本」「苦手な生徒への支援」「生徒の運動能力への不安」である。「段階的な指導」は柔道の授業を行う際、投げ技の指導において、恐怖感を持たないように低い姿勢から転がるなど、段階的に指導しているが、女子生徒には一度も体験させてあげられないまま終わってしまうことがある、という悩みであった。異性の生徒への指導するうえで段階的な指導を行うことができないということであった。「場の工夫、経験者の見本」は、マットを使用したり、柔道部員に指導の補助をお願いしたりするといった、柔道経験のない教師ならではの悩みであった。「苦手な生徒への支援」は、柔道に対する意欲が低かったり、指導しても中々上達しなかったりする生徒、武道への接点が少ない女子生徒への支援についての悩みであった。「生徒の運動能力への不安」は、マット運動が苦手な生徒が増えてきたことで、生徒の運動能力が低下してきていることへの悩みであった。

指導するうえでの悩みの二つ目は、授業者の技術である。これについて3種類の回答があった。それは、「専門的な技術」「応用技の指導」「時間配分」である。「専門的な技術」は授業者が専門に柔道をしていないことで、一人で柔道の授業を行うことが大変である、といった悩みである。柔道を専門にしていないこともあり、柔道について深く教えることができないようであった。「応用技の指導」は、柔道の授業内での課題である、連絡技の指導をすることができないという悩みであった。「専門的な技術」に類似して、授業者の技術によって連絡技と

表2 KJ法により分類した柔道の授業の指導上の悩み

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	記述内容
施設面	道場の広さ		・安全に授業するための場所の確保が難しい。できる限り運動量を多くしてやりたいが、現実では難しい。 ・生徒数と畳の大きさ(広さ)が比例しない。スペースが狭くて危険。・生徒数が増えたが、道場は狭く危険。
	畳の設置時間		・畳の設置に時間がかかる。(道場がないため)
指導上の悩み	生徒への支援の方法	段階的な指導	・立ち技の指導において、恐怖感を持たないように低い姿勢から転がるなど、段階的に指導している。
		場の工夫と経験者の見本	・マットを使用したり、柔道部員を相手に上手に受けをとったり、とりをお願いしている。
		苦手な生徒への支援	・受け身や技のコツを中々つかめず「痛い」ことが原因で意欲が上がらない生徒に対する支援の仕方。(個別で指導してもできない) ・女子生徒には、(立ち技を)一度も体験できないまま終わってしまうことがある。
	生徒の運動能力への不安	・マット運動が苦手な生徒が増えてきている。	
授業者の技術	専門的な技術	・専門的に柔道をしていないこともあり、一人で授業するのは大変である。	
	応用技の指導	・連絡技の指導ができないこと。	
	時間配分	・怪我が不安で、ウォーミングアップに時間を多く割いてしまい、主運動の時間が少なくなってしまうこと。	
保護者の対応	費用の負担	・柔道着の購入は保護者負担となること。	
	怪我の説明	・子ども達の体力低下とともにけがをした際の保護者への責任説明。	
その他	コロナ対策	・コロナ対応	

いった応用課題の指導を行うことができないようであった。「時間配分」は柔道という怪我のしやすい競技を指導するにあたって、怪我が不安で、ウォーミングアップに時間を多く割いてしまい、主運動の時間が少なくなってしまうことへの悩みであった。

三つ目は保護者への対応である。保護者への対応の中の悩みは2種あった。一つは費用の負担についてである。柔道衣の購入を各自の家庭にお願いしていることが保護者の負担になってしまい、その対応が悩みになっていた。もう一つが怪我の説明である。柔道は他の競技に比べ怪我をしやすいため、怪我をした際の保護者への説明が必要になってくる。この対応が悩みであるようであった。

最後に、その他として分類した、コロナ対策である。現在のコロナ禍においての授業内でのコロナへの対策が悩みになっているようであった。

4. まとめ

本研究は中学校保健体育教諭10名を対象とし、質問調査紙法を用いて柔道の授業の実施状況や、柔道の授業を通じて身に付けてほしいこと、柔道の授業を行う際特に注意していること、柔道の授業の指導上の悩みについて明らかにした。研究の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 対象者の属性と柔道の授業の実施に関して、10人中柔道経験者が2名であり、10人中9名が柔道の授業を実施し、9～10回で一単元を構成している者が最も多かった。また、単元構成の長さや指導者の柔道経験の有無は関連がなかった。
- 2) 柔道の授業を通して生徒に身に付けてほしいことについては、安全や受け身の技術、礼法や相手を尊重する態度、ルール順守に関する項目のスコアが高かった。また、スコアが中位のうち比較的高かったのは、歴史と伝統、受けの責任、基本動作、思考力、課題克服であった。中位のうち比較的低かったのは、知識と仕組み、投げ技の技術、固め技の技術といった具体的な技術に関する項目であり、特に初任期の教師の意識が低かった。また、スコアが下位であったのは、応用技と審判規定であった。総括すると安全や礼法、尊重する態度、受けの責任等の態度面、歴史と伝統と基本的動作については比較的認識が高かったが、知識と仕組み、投げ技の技術、固め技の技術といった具体的な技術が比較的認識が低く、また、連絡技や返し技等を含む応用技についても認識が低いという傾向があった。
- 3) 柔道の授業を行う際特に注意していることについては、大きく分けて安全面と指導の工夫の2種が

あった。安全に関しては、全体的な安全の配慮や指導面での受け身の指導、施設(畳)の安全確認や安全を確保する為の教具の工夫であった。指導の工夫については、段階的な指導やICTの活用といった技術面、礼法や思いやり、楽しさといった精神面、みだしなみといった清潔・整容面があった。

- 4) 柔道の授業の指導上の悩みについては、大きく分けて施設面、指導上の悩み、保護者の対応、その他の4種があった。施設面では道場の広さの確保や都度設置の畳の設置時間の悩みがあった。指導上の悩みでは段階的な指導、場の工夫と経験者の見本、苦手な生徒への支援、生徒の運動能力への不安の生徒への支援の方法の悩みがあった。また、専門的な技術、応用技への指導、時間配分の授業者の技術の悩みがあった。保護者の対応では、柔道衣購入等費用の負担と怪我の説明についての悩みがあった。その他ではコロナ対策があった。

研究の限界と今後の課題としては、本研究では対象者数が10名という限定した範囲での研究であったが、よりサンプル数を増やした分析が望まれるであろう。また、より多くのサンプル数を確保し、柔道経験のある教師と持たない教師、初任期の教師と中堅、ベテラン期の教師の群を分け、クロス集計をして傾向の違いを考察する研究によって示唆のある結果が得られるであろうと考える。

付記：本研究はA大学手形地区人を対象とした研究倫理審査委員会の倫理審査を受け、認定(第3-7号)の下実施しています。

謝辞：本研究はA県総合教育センターの協力の元、実施されています(指導主事、萩原亨先生)。また、A県内の中学校保健体育教諭の10名の方々には貴重な時間を割いていただき、質問調査紙に回答いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- 穴井隆将(2015)「武道必修化」に伴う柔道授業のあり方に関する研究～教師の視座・生徒の運動有能感の視点から～. 奈良教育大学修士論文, 72P.
- 北村尚浩ら(2017) 中学校における武道教育の課題: 自由記述データの計量的分析. 武道学研究, 50(1): 29-38.
- 古賀範雄・大滝忠也ら(1985) 教科体育の柔道に関する研究—中学校体育における柔道の現状と今後の課題—. 武道学研究, 18(2): 87-88.
- 箱島道泰・齋藤浩二ら(2014) 中学校における武道授業の実態に関する研究—宮城県の柔道の指導内容を中心

- に一、仙台大学大学院スポーツ科学研究修士論文集
15：153-154.
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説保健体育編。
中嶋哲也（2017）武道授業を担う教師の養成段階における
課題。体育科教育9月号：32-35.
- 野瀬清喜・田中一郎・野瀬英豪（2009）武道必修化に伴う
柔道指導法のあり方について。埼玉大学紀要 教育学
部, 58(2)：17-34.
- 三戸範之・津谷泰介ら（2014）開発された柔道映像教材に
おける運動課題の特性：提示内容の有効性。秋田大学
教育文化学部研究紀要 教育科学部門, 69：37-42.
- S・B・メリアム（2010）調査研究法ガイドブッカー教育に
おける調査のデザインと実施・報告。ミネルヴァ書房,
pp.110-182.
- スポーツ庁政策課学校体育室（2019）「令和元年度武道指
導に関する状況調査」の結果。 https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4475/00367327/02tyousa_kekka.pdf.
- スポーツ庁（2020）「武道等指導充実・資質向上支援事業」
の調査報告書。 https://www.mext.go.jp/sports/content/20200910-spt_sseisaku02_000005311_1.pdf
- 山本浩二・島本好平・永木耕介（2013）中学校柔道授業の
検討：柔道の技術習得とコミュニケーションに着目し
て。武道学研究, 45(3)：181-195.